

第VI章 総括

第1節 午王山遺跡弥生時代集落の展開

午王山遺跡は独立丘であることから、確実に遺跡範囲が限定され、集落範囲も確定できる場所である。本章では第V章第3節の「午王山遺跡出土弥生土器の編年的位置づけ」を踏まえ、本報告書の総括として遺跡内での集落の変遷をまとめる。なお、遺構形態が不明瞭な住居跡や出土遺物が少ない遺構については、時期的な段階区分が困難であるため本章では取り上げていない。また、遺跡の南側斜面は1965（昭和40）年前後に土砂採取工事などで一部が削り取られ、旧地形が消失している場所も存在する。

弥生時代中期後半（第253図） 宮ノ台式期の住居群である。第253図で示した第82・87・133号住居跡の3軒が検出されている。A溝の内側に分布し、3軒全ての住居跡が他の住居と重複し、かつ、壊されていることが共通し、主軸もN-50～53°-Wを示し方向がほぼ同じである。出土遺物は少ない。この午王山遺跡では、主体的な時期の集落とは見られないため、現在確認されている3軒のほか、未調査区に住居跡の分布は予想されるが、それでも全体図の遺構分布状況からは10軒も超えないと考えられる。このことから、調査の初期段階では壺口縁部破片の出土などからA溝を弥生中期後半とも考えたが、宮ノ台式土器は、全体の出土遺物量から見てもごく少量の出土であり、環濠掘削の作業推定土量（第V章第2節）から推測しても弥生中期後半の段階では、A溝の環濠集落とは考えにくい状況である。

弥生時代後期前半（第254図） 岩鼻式と久ヶ原I式土器が伴う住居群である。第254図で示した第1・3・18・72・74・81・97・105・108・119・124・137・141号住居跡の13軒が検出されている。未調査区に同段階の住居跡の分布は予想されるが、それでも全体図の遺構分布状況からみても同様の住居跡は20軒も超えないと考えられる。この段階の各住居跡は、平面形が隅丸長方形を呈し、内部に複数の炉を持つことが特徴で、出土土器は、櫛描簾状文を持つ岩鼻式土器と沈線区画された羽状の山形文を持つ久ヶ原I式土器が共伴して出土している。A溝の環濠からは、岩鼻式土器はほとんど出土しないことから、弥生時代後期前半のこの段階での集落と環濠の関係性は薄い。

午王山遺跡から出土する岩鼻式土器は、第V章第3節の分析・検討から、三段階の区分が見られるので、第254図では「網かけ」を変えて各段階の分布状況を確認する。

岩鼻式2期古段階は、第1・3・72・97号住居跡の4軒で、隅の丸みが大きな大型の住居群である。

岩鼻式2期新段階は、第74・108・124・137号住居跡の4軒である。

岩鼻式3期段階は、第81・105・141・18・119号住居跡の5軒で、規模が小さめの隅丸長方形の住居群である。

弥生時代後期中葉前半（第255図） 東海東部地方の菊川式土器を祖型とするハケ刺突文やハケ目沈線が施される土器群がみられる遺構である。下戸塚式土器の中段階古期（第V章第3節3）で、第255図で示した第4・8・9・11・20・24・27・57・59・68・73・75・84・86・90・91・93・100・107・110・113・118・121・128・129・138・144号住居跡の27

軒が検出されている。集落内でも多数を占め、A溝環濠の内側に全て分布している。住居形態も楕円形や小判形の形態であり、遺物が少なく時期比定が難しい住居跡も形態が同様なものはこの段階と考えられる。A溝覆土からも同段階の土器が部分的にまとまって出土している。第V章第3節でも述べられているが、遺構の分布状況と出土遺物、A溝の廻り方からみて、環濠集落はこの段階で形成され、早い段階での埋没と部分的な遺物の投棄が行われていたことが判明した。

弥生時代後期中葉後半（第256図） 下戸塚遺跡中段階新期では、第5・10・12・14・16・30・42・44・50・51・52・58・63・69・77・78・88・92・95・130・132・142・146号住居跡の23軒が検出されている。集落内でも多数を占め、遺跡平坦部の全体に分布している。住居形態も前段階と同様であるが、長軸・短軸の差が少なく寸胴な小判形が多くみられる。遺物では壺などの文様ではハケ目沈線区画の下段など省略されるものが多くみられる。住居跡はA溝・B溝の区画域の外側にも分布の広がりをみせ、A溝環濠覆土からも同段階の遺物が出土し、環濠埋没が進んでいることを示し、西側の平坦部では、新旧関係がわかるように第50・51号住居跡がA溝上に構築されており、またB溝上にも同段階の第30・63号住居跡が構築され、この段階では、A溝・B溝2条とも環濠としての機能が終了していることが判明した。

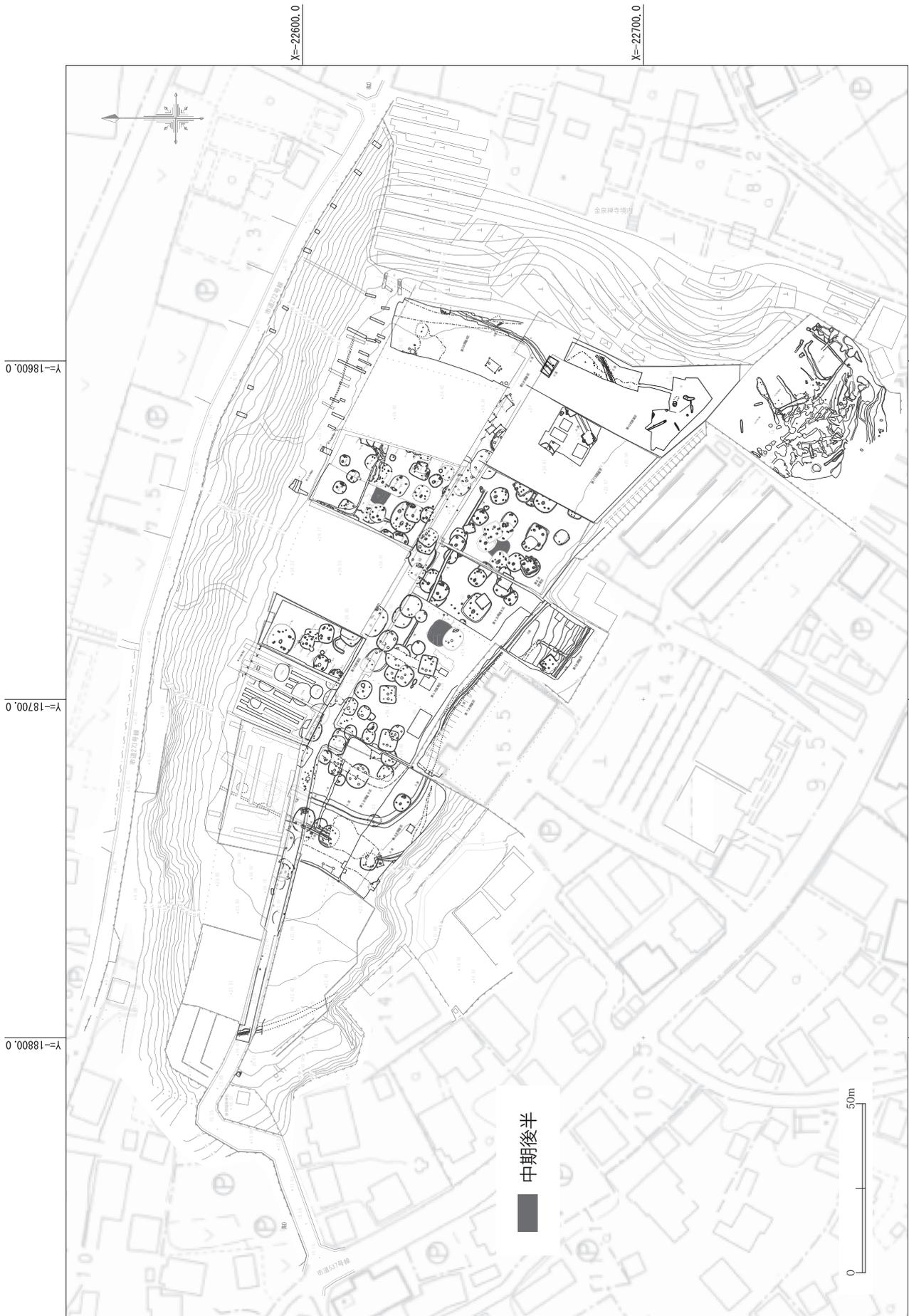
弥生時代後期後半（第257図） 下戸塚遺跡新段階で、壺などの文様に、端末結節文が多くみられる段階である。午王山遺跡の集落内では数軒の住居跡がまとまっているように検出されている。

新段階古期では、壺などのハケ目沈線やハケ刺突文などが簡略化され、端末結節文がみられるようになる。第257図で示した第19・62・101号住居跡の3軒である。

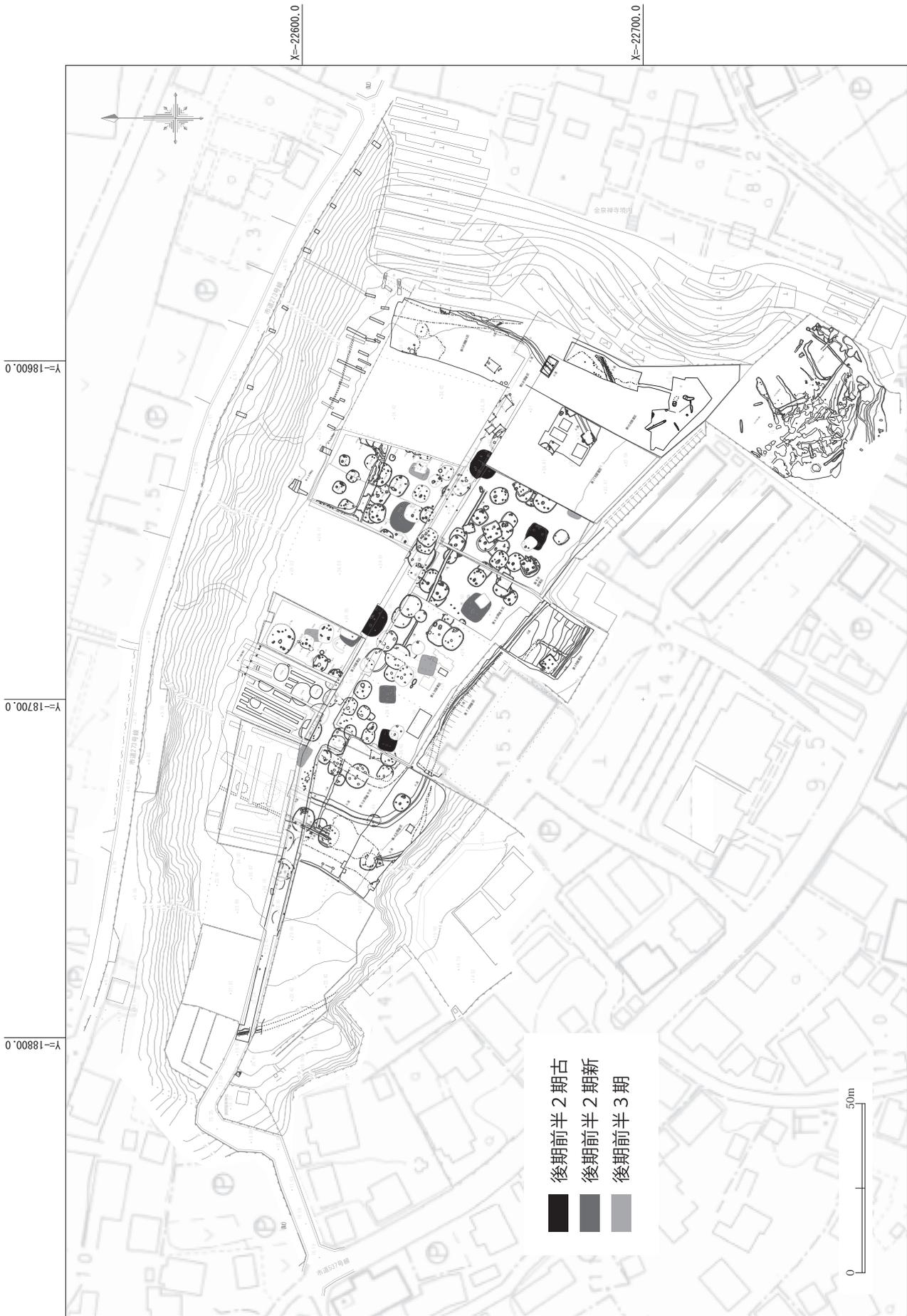
新段階新期では、壺などにはハケ目沈線やハケ刺突文などがみられず、楕描直線文や波状文が施され、端末結節文が盛行するようになる。第257図で示した第23・96・104・109・114号住居跡の5軒である。

午王山遺跡での弥生時代集落の最終段階である。過去の調査報告書では、後期の後半から終末の時期と捉えていたが、本総括報告書では、近年の資料増加と研究成果から見解を改め、後期後半のこの段階で午王山遺跡の弥生時代集落は終焉したと考える。

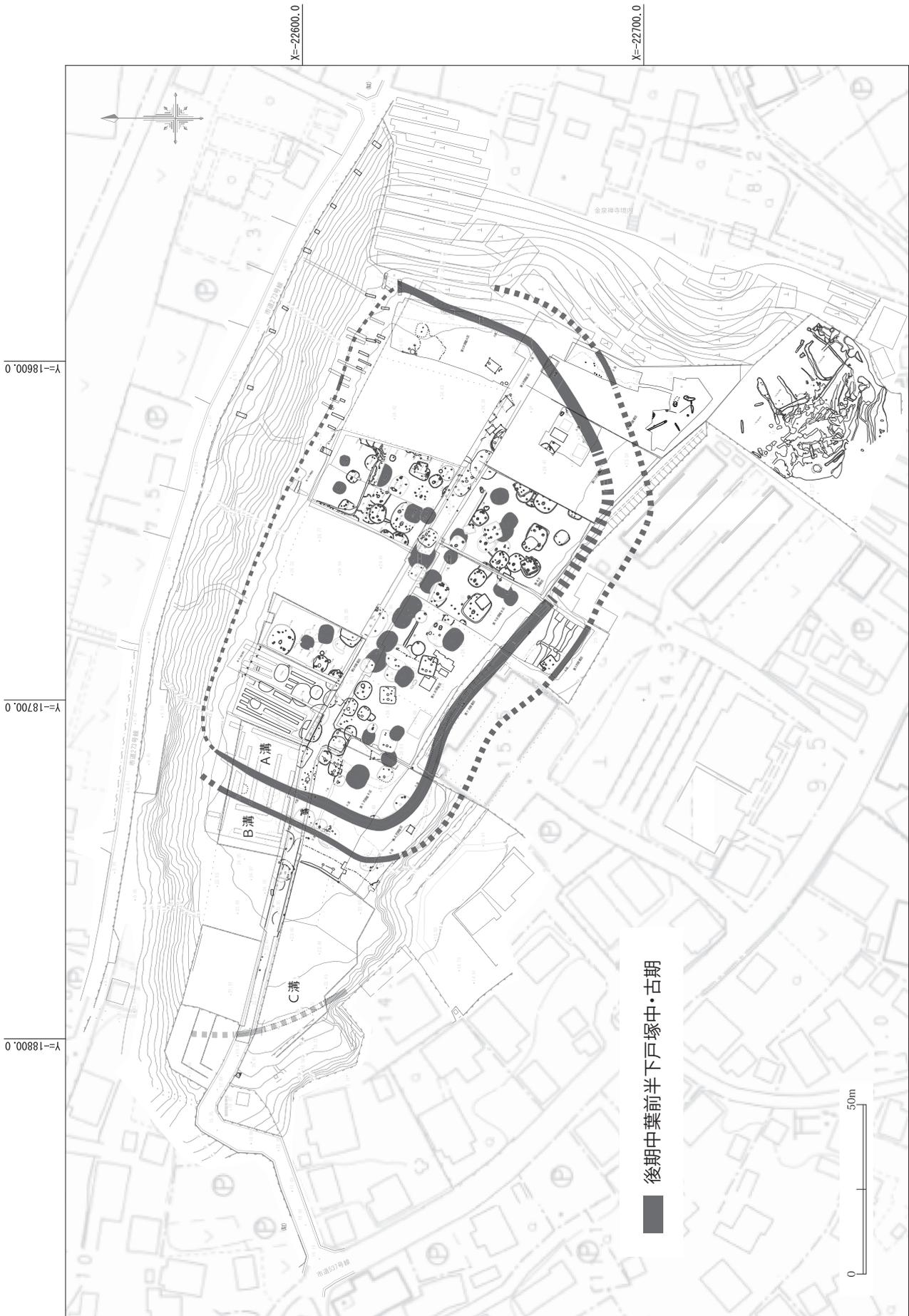
A・B・C溝（環濠）について（第190図） 午王山遺跡で検出されたA・B・C溝は断面形状が「V字状」であり、典型的な弥生時代の環濠とされる溝で、出土遺物から後期の時期と判断した。第V章第2節の分析にあるように、全体図のA・B溝の廻る状況から、A溝B溝間の幅が、2次調査区西側や第4次・第5次B区であれば6～7m間隔、第3次・第10次調査区では推定12m間隔と差があるが、検出されている場所では2条が常に並行している。また出土遺物をみると、復元資料である第198図10の破片の多くは、A溝3次調査区出土であるが、破片のうち1点では、同調査区のB溝覆土中層から出土し接合している。このことも含め第V章第3節をみると、環濠の利用期と衰退・終期が第50・51号住居跡、第30・63号住居跡との切り合い関係及び出土遺物の分析によりA溝・B溝は同時期に機能したと推定される。また、第4次調査区では、A溝の方向性が地形にとられない平坦部でありながら、カーブの曲がる方向性がB溝も同じであり、第2次・第5次調査B区では平行



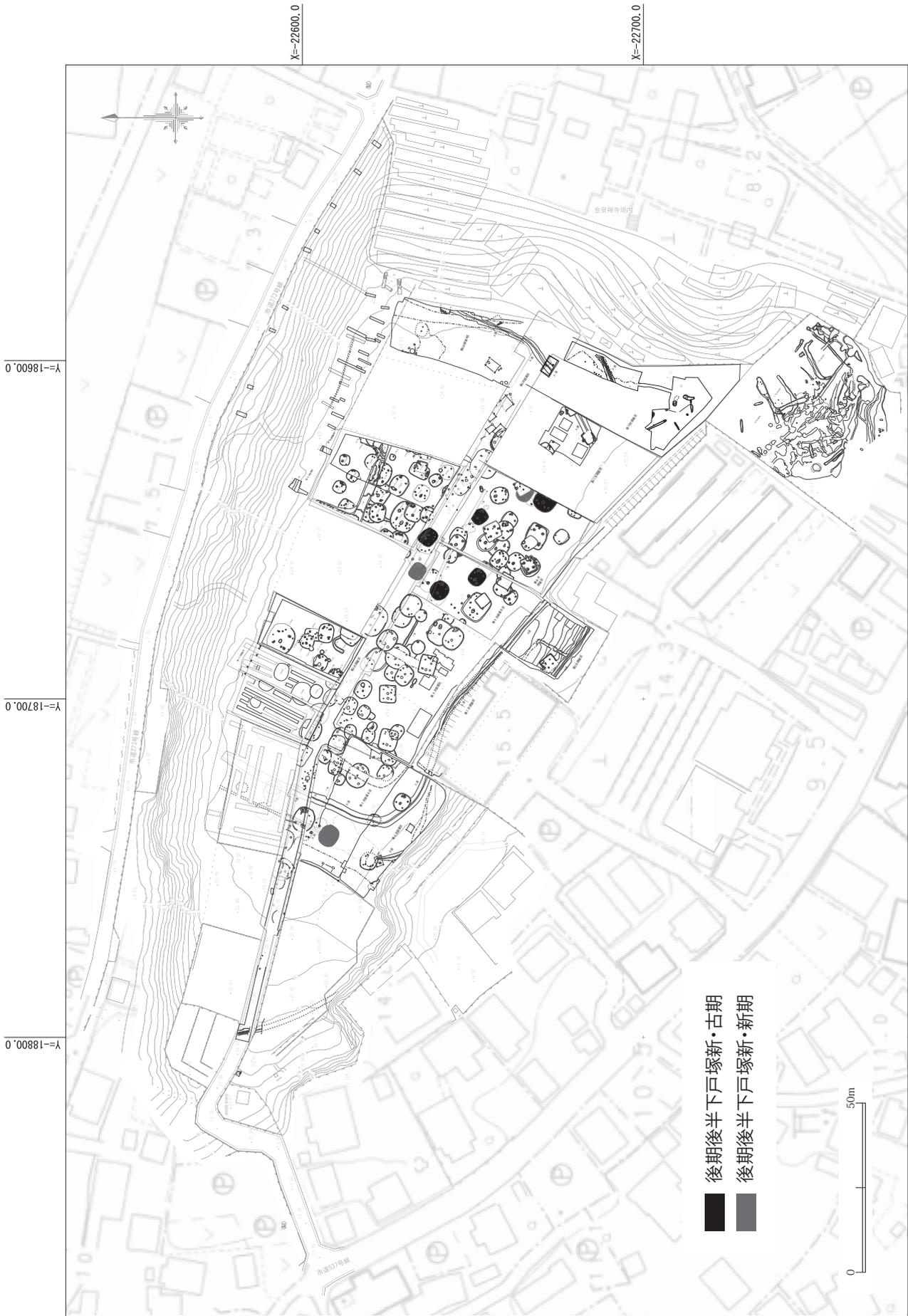
第253図 午玉山遺跡弥生時代中期後半遺構分布図



第254図 午玉山遺跡弥生時代後期前半遺構分布図



第255図 午王山遺跡弥生時代後期中葉前半遺構分布図



第 257 図 午王山遺跡弥生時代後期後半遺構分布図

線のように並行していることも傍記として挙げられる。

北側斜面部の新倉3丁目2811-1地点のトレンチ確認調査（第23図）では、小溝が北側緩斜面を横走する様に確認されていることから、削られたA溝（環濠）の残存した最下部が廻っているとも予想され、これにより、北側斜面では、一部は地形ごと壊れているが第190図の様に環濠として一周する可能性が予想される。B溝は、A溝と共に常に並行関係であるが、北側斜面部に関しては不明である。

C溝の位置する場所は、午王山西側の斜度が緩い場所で、C溝の先の南側斜面に沿った崖地では「V字状」の黒色土がローム壁面に確認できることから、第13次調査区からの推定線を示した。現在の標高22.0mの等高線に沿って推定ラインとなっている。標高22mの等高線上には第3次調査区のB溝も同じ高さで、第1次調査区では方形周溝墓の溝端が消失する高さでもあり、そこでは環濠のような「V字状」の溝は検出されていない。C溝北側の延長先は、昭和時代の土地造成で地形ごと削り取られているため不明である。このC溝が、この位置・この標高から丘を巡る環濠なのかは第1次・第3次調査区からC溝とみられる溝が確認されていないことから独立丘の端を断ち切るための条濠の可能性が高いとみられる。

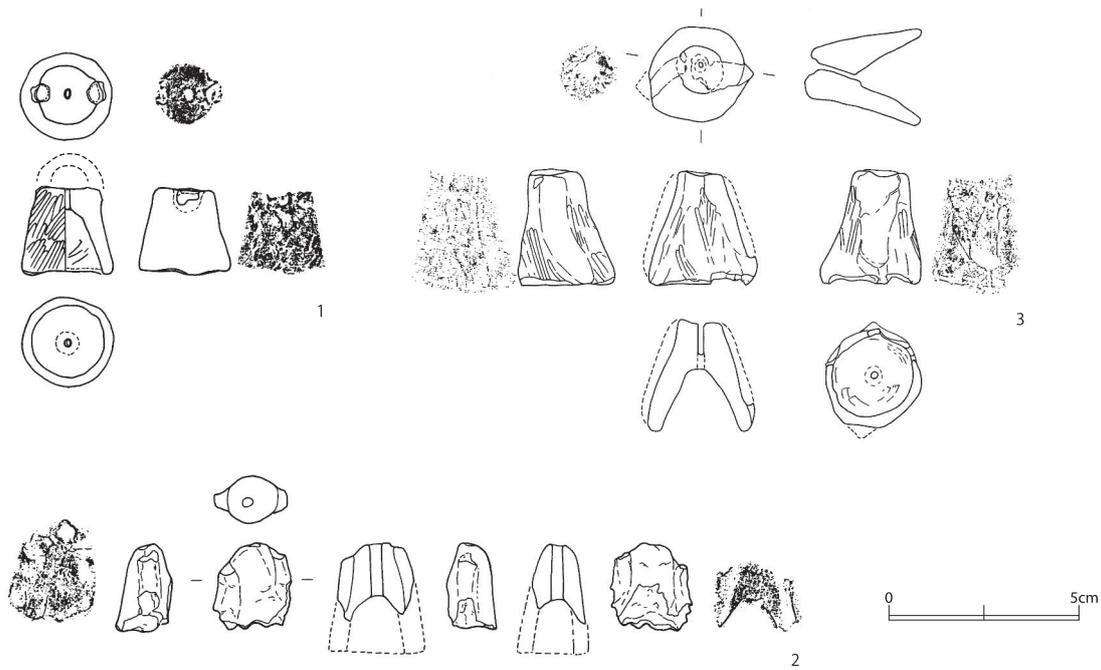
このほか掘削土量などを第V章第2節において小倉氏に検討を行っていただいている。また付帯施設のことも投げかけていただいているように、当時の地表面（生活面）は耕作等により不明であるが、A溝・B溝の並行する溝間でも弥生時代の住居跡の存在が希薄であり、A溝内側から幅5～6mの範囲は住居跡の空白帯が存在し、発掘調査では土塁の痕跡は確認出来なかったが、推定される空間と環濠掘削の相当量の土量が見込まれることから、空白帯はその存在の可能性を示している。

方形周溝墓について（第211図） 第1次調査区と第10次調査区にて合計5基の方形周溝墓が検出されている。遺構の形態も耕作などの攪乱により、周溝上部が削平されているため四隅の状態も不明であり、出土遺物も非常に少なく、時期を定めるに至る要素は多くはないが、周辺の住居跡の分布などから弥生時代後期のものと思われる。5基の方形周溝墓には、主軸方向により第1・5号方形周溝墓の軸線と第2・3・4号方形周溝墓の軸線の2方向がみられる。また、第1次調査区では、尾根上の位置に方形周溝墓が並んで検出されていることから、第1次調査区の西側は、集合住宅建設により削り取られているが、そこではまだ2～3基の方形周溝墓が存在していたと推測される。

遺跡の平坦面には住居跡が存在し、居住域外側の狭い尾根状の場所に方形周溝墓が展開していることで、集落と墓域を画する意味も併せてA溝・B溝を含む環濠集落と関係があることを暗示している。

銅鐸形土製品について（第258図） 午王山遺跡では、特殊な遺物としては銅鐸形土製品が3点、環濠であるA溝覆土中層より出土した。同一層位からは東遠江系であるハケ刺突文が特徴的な下戸塚式土器が出土している。関東では出土例が少ないこの銅鐸形土製品について以下に簡単に示しておく。

第258図1（第198図26）は、A溝（第3次調査）中層から出土した。現高は3.5cm、外面はミガキが施され、舞の中心には焼成前穿孔があり舞の縁から身の頂部にかけて2か所の剥落痕が確認でき、紐の存在が窺える。側面には、鱗はない。



第258図 A溝出土銅鐸形土製品

第258図2(第202図63)は、A溝(第5次調査B地区)の中層から出土した。現存長3.6cm、外面は丁寧にナデられているが一部にハケ目の痕跡が若干認められる。鱗付きの銅鐸形土製品の破片であり、頂部には焼成前穿孔あり、両脇に粘土紐を貼り付け鱗を模している。

第258図3(第204図67)は、A溝(第7次調査)の環濠覆土の中層から出土した。現高4.5cm、外面はミガキが施され、側面には鱗の残部と剥落痕が明瞭に観察できる。舞部には焼成前穿孔が中心より少し斜めに施されている。

朝霞市向山遺跡でも銅鐸形土製品が2点出土しており、完形品の1点は弥生時代後期の住居跡の床下から出土している。高さは6cm、身部の上端はハケ目沈線の区画線が施され、沈線より下にハケ目が施されている。そのほかの1点は鱗、舞部の孔が確認できる銅鐸形土製品の破片(現高2.7cm)で外面にハケ目が施され、別の弥生時代後期の住居跡から出土している⁽¹⁾。この朝霞市向山遺跡は弥生時代中期の鉄斧が出土したことでも知られているが、後期では、銅鐸形土製品にも施されていたハケ目沈線やハケ刺突文が施された、東遠江系の下戸塚式土器が出土する遺跡でもある。

その他の銅鐸形土製品の出土例は、群馬県太田市の成塚石橋遺跡で、斜線を交差させた菱形の沈線文が施される銅鐸形土製品が出土している。東京都町田市熊ヶ谷遺跡、神奈川県横浜市稲荷前遺跡などで小型の銅鐸形土製品の出土が知られている。

小銅鐸では、千葉県に出土例が見られるが、東京都八王子市中郷遺跡の弥生時代から古墳時代へ移行期の住居跡から鱗がないもの、新宿区高田馬場三丁目遺跡(第6図83)の弥生時代後期後半とされる住居跡からは、鱗と内面突帯が作り出されているものが出土している。この高田馬場三丁目遺跡のすぐ東側には、同じ神田川水系で下戸塚遺跡が存在し、そこは東遠江系の下戸塚式土器の指標となる遺跡である。

銅鐸は西日本から中部東海地方を主とする祭祀用具である。関東地方に伝わってきている

ものは、持ち運びやすい、小銅鐸や銅鐸を模した銅鐸形土製品が散発的に出土している。午王山遺跡の銅鐸形土製品は、同一集落の同一遺構から3点も出土していることは非常に特殊な例であり、東遠江系のハケ刺突文が特徴の「下戸塚式」土器の文化と共に招来したものと思われる。

第2節 午王山遺跡と周辺の弥生時代集落

和光市内での主な弥生時代集落遺跡は、午王山遺跡（第259図42）から南側に谷を隔てた四ツ木遺跡（第259図41）があり、弥生時代後期中葉から終末期と考えられる住居跡と方形周溝墓が検出されている。同じく谷を挟んだ南東方向には妙典寺遺跡（第259図43）があり弥生時代後期後半から終末期と考えられる。和光市と板橋区・練馬区の境をなす白子川の左岸で、午王山遺跡から南東に見渡せる舌状台地上に吹上遺跡（第259図45）と下里遺跡（第259図44）があり、吹上遺跡ではハケ刺突文を持つ下戸塚式期の環濠集落と方形周溝墓群が見られ、吹上遺跡の西側の下里遺跡まで方形周溝墓群が分布している。吹上遺跡を先端とする白子川左岸では、上流に向かうにつれて集落の時期が新しくなるような状況がみられ、吹上原遺跡（第259図46）では、弥生時代後期後半の方形周溝墓群が検出されている。市場峡・市場上遺跡（第259図47）では、弥生時代後期末の集落が検出されている。城山遺跡（第259図48）では、弥生時代後期後半の住居跡が検出されている。城山遺跡より白子川の上流に向かうにつれて弥生時代から古墳時代前期の様相で時期が新しくなる傾向である。このことは、白子川右岸の板橋区側も同様の傾向がみられ、成増一丁目遺跡（第259図49）では弥生時代の終末期の集落が展開している。午王山遺跡の北西側にも舌状台地があり、その台地上に6遺跡が接して分布している。そのうち花ノ木遺跡（第259図36）では、弥生時代中期の集落のほか、弥生時代後期前半新段階のハケ刺突文を持つ下戸塚式の方形周溝墓、後期後半まで継続する環濠2条と集落が埼玉県埋蔵文化財調査事業団の発掘により検出され、その他、事業団調査の環濠とは方向を別にするハケ刺突文が出土する環濠1条（第260図）が和光市の発掘調査で検出されている。

岩鼻式土器は、中部高地の影響を受けた楕円波状文、楕円簾状文が施され、比企地域で多く見られる土器群で、東松山市の岩鼻遺跡を標式遺跡とする土器である。東松山市では、岩鼻遺跡ほか附川遺跡、雉子山遺跡等で出土し、川越市霞ヶ関遺跡でも検出されている。和光市では、午王山遺跡において時期の前後はあるが計13軒の住居跡が検出され集落として認識されている。朝霞市稲荷山・郷戸遺跡（第259図34）では2軒の隅丸長方形の住居跡から岩鼻式土器が検出されている。板橋区では、白子川を挟んだ右岸に赤塚氷川神社北方遺跡（第259図53）で出土例があるが、板橋区内の他の遺跡や北区では岩鼻式土器の出土例を聞かないため、旧入間川右岸の武蔵野台地で和光市周辺が岩鼻式土器群の分布圏の境界とみられる。午王山遺跡では、岩鼻式は久ヶ原I式期と伴って出土しているため、帯縄文土器群の分布圏にも含まれている。

下戸塚式土器は、東海地方の東遠江に分布する菊川式土器を出自とし、ハケ刺突文で擬似縄文を表す壺形土器が特徴的であり、新宿区下戸塚遺跡（第6図81）の環濠の内側の集落出土土器を指標としている。また、下戸塚式新期とした段階には端末結節縄文が盛行する。

下戸塚遺跡は、通常の弥生時代集落の台地縁辺部の分布とは異なり、神田川中流域の谷筋の右岸に位置している。同じ新宿区内には、戸山遺跡（第6図82）、高田馬場三丁目遺跡（第6図83）、下落合二丁目遺跡（第6図80）など弥生時代後期後半の集落が分布している。また、武蔵野台地の荒川右岸及び東京湾に面する崖線上に低地部を見渡すように弥生時代集落が文京区、北区などに分布しているが、御殿前遺跡（第6図74）、飛鳥山遺跡（第6図72）、赤羽台遺跡（第6図67）などでは、ハケ刺突文、ハケ目沈線が施される土器は希薄である。

下戸塚式とした土器群が出土する集落は、和光市の午王山遺跡では住居跡などが多数検出され、和光市吹上遺跡、花ノ木遺跡、朝霞市向山遺跡（第259図30）、中道・岡台遺跡（第259図29）、新屋敷遺跡（第259図33）でも遺構遺物が多く検出されている。そして、板橋区西台後藤田遺跡（第6図59）、西台遺跡（第6図58）、四葉地区遺跡（第259図56）、徳丸東・徳丸北野神社遺跡（第259図57）などでも確認されており、和光市周辺地域が東遠江からの影響を受けた下戸塚式土器の分布圏の境界と見られ、午王山遺跡がその分布の中心部とも考えられる。

午王山遺跡を含め和光市周辺は、弥生時代の環濠集落が多くみられる地域でもある。

朝霞市では、黒目側右岸に中道・岡台遺跡（第261図）第3地点にて谷上部の位置に環濠が一部検出されている。越戸川左岸の台地上で和光市花ノ木遺跡の対岸の位置の稲荷山・郷戸遺跡（第261図）の第2・3地点でも環濠が検出され、検出位置から集落を一周する環濠と見られ、第3地点の崖際では、二股に分かれ一条は崖下へ向かい消失している⁽²⁾。

和光市では、花ノ木遺跡（第260図）で環濠集落群が検出され、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の東京外かく環状道路建設に伴い発掘された遺構であり、2条が並行して検出されている。その他は、現東京外かく環状道路の東側で和光市調査区第2・11・12・13次調査区にて、前出2条の環濠とは別方向の環濠が1条検出されているため、2つの環濠集落が検出されている。さらに東側の半三池遺跡（第260図）でも、環濠と同形態の弥生時代の「V字状」の溝が検出され、同一の舌状台地に3つ目の環濠集落を予想させている。白子川左岸の舌状台地先端には吹上遺跡（第260図）が存在し、台地先端を断ち切る様に「V字状」の溝が弧状に掘削され環濠集落を成している。住居跡と環濠からは、ハケ刺突文・ハケ目沈線が施される下戸塚式土器が出土している。

午王山遺跡（第260図）では、並行する2条の環濠と独立丘西側の緩斜面上に条濠が掘削されている。この独立丘の地形からか南側では、環濠が並行する様に廻り、北側ではA溝（内環濠）の1条は予想されるが、B溝（外環濠）は廻るのかは不明である。

板橋区でも、沖山遺跡・四葉地区遺跡（第261図）では、中期後半と後期中葉の環濠に大別される。沖山遺跡では1号溝は中期後半の環濠集落と見られ四葉地区遺跡から続く環濠が一周すると考えられており、2号溝はハケ刺突文を施す壺など下戸塚式の要素が色濃い土器群が検出されている。四葉地区遺跡の東部台地では、後期の環濠が台地を断ち切る様に検出され、更に外側（台地内側）約100mの場所にも「V字状」の溝が検出されているが、二重環濠になるかは不明である。

和光市周辺は、午王山遺跡も含め環濠集落が多く目につく地域であり、特に後期の集落が多く、午王山遺跡を中心として東遠江からの影響を持つ下戸塚式土器が見られる地域とも重

なることから、少なくとも他地域から流入した土器文化の影響もあり環濠集落が展開したことが考えられる。

第3節 午王山遺跡の調査成果と歴史的価値

和光市では、午王山遺跡を過去15回にわたり発掘調査を行い、確認調査も幾度となく行った結果、特に弥生時代の遺構・遺物が多数検出されたことにより内容が蓄積され、遺跡は上部の平坦面のみならず午王山全体が一つの環濠集落として立地し展開することが明らかとなった。なおかつ、近隣周辺を含め荒川流域ではみられない独立丘の地形とともに遺跡の重要性がより深まった。以下に、調査成果と歴史的価値を示す。

① 午王山遺跡は、荒川（旧入間川）低地を望む独立丘に立地し、主に弥生時代の150軒以上の住居跡が検出された集落遺跡である。この集落は、周囲と台地が切り離され範囲が決まっていることから各遺構の時期を検討することにより、各段階の遺構の変遷が理解できる遺跡である。また、この独立丘の中で平坦部の居住域と東縁辺部の墓域からなる地形制約がある中での集落の全容を改めて確認することができた。

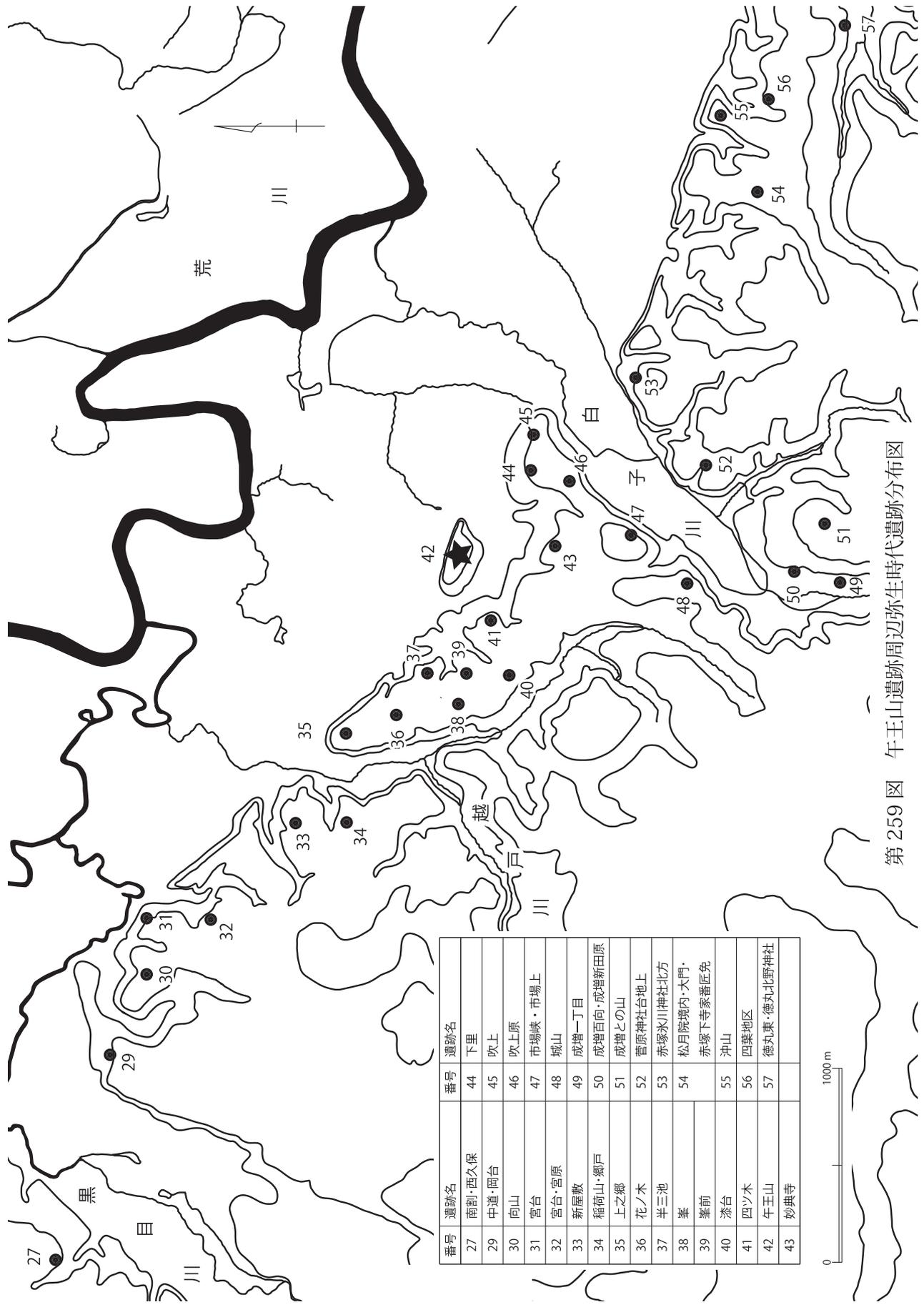
② 午王山遺跡の弥生時代集落は、弥生時代中期後半に数軒の宮ノ台式期の住居跡から始まり後期後半までの集落が展開し、本総括報告書では、第Ⅴ章第3節の編年的位置づけに基づき、本章第1節にて各段階の集落の変遷を考え、環濠集落が展開される段階は後期中葉前後で、環濠の造営が土器型式からみると下戸塚式期の中段階であることが理解できた。

③ 独立丘に立地する環濠集落として、3条の溝を持ち、A・B両溝は常に並行して廻る様相を示し、両溝の間隔状態から内側のA溝の廃絶後にB溝の掘削を行ったとは考えづらいこと、また、B溝の出土遺物が少量ではあるがA溝出土遺物と同時期と見られることなどから関東地方では類例が少ない二重環濠と推測される。C溝は、西側の緩斜面で検出され南側緩斜面に弓なりに進むことが確認されたが、丘を全周するとは考えられず条濠と考えられる。これまでの調査では、3条同時期存在の確証は得られていないが、A・B両溝との関連性は窺われる。

④ 弥生時代後期の土器では、中部高地系の櫛描簾状文が特徴的な岩鼻式土器を持つ集落があり、岩鼻式土器には久ヶ原Ⅰ式期の土器が相伴している。東海東部系の菊川式系統でハケ刺突文・ハケ目沈線が特徴的な下戸塚式土器を持つ集落も存在する。土器以外では関東では出土例が少ない銅鐸形土製品が環濠から3点出土し、下戸塚式土器ともども東海東部からの影響と交流が理解できた。

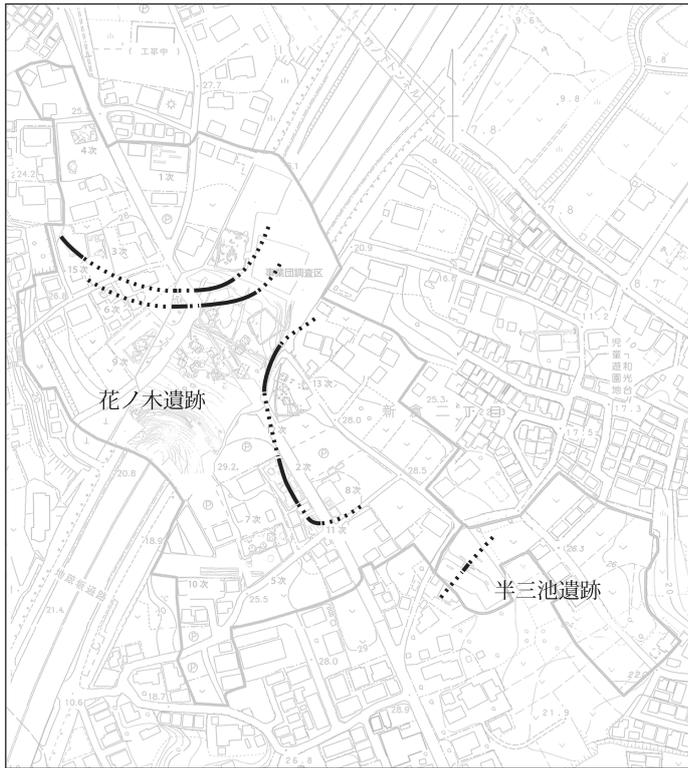
⑤ 遺構の住居跡では、岩鼻式の住居跡は、形態が隅丸長方形、柱穴が楕円形、柱穴間に地床炉が2～3基存在するなど特徴的な住居跡で文化の違いがわかる住居跡群である。下戸塚式の住居跡は、小判形を呈し、炉跡は火皿式炉が多く、住居跡の軒数も多量である。

この午王山遺跡では、長野・群馬と北から来た岩鼻式の文化が久ヶ原Ⅰ式と相伴し弥生時代後期前半に集落を形成した。後期中葉には東海東部系のハケ刺突文・ハケ目沈線が特徴的な下戸塚式土器が出土する遺跡として、午王山遺跡を含め白子川近辺の吹上遺跡、花ノ木遺跡、朝霞市中道・岡台遺跡などが確認されている。午王山遺跡は多重環濠集落の可能性が高く、住居跡も多数検出されたことから、下戸塚式分布圏北半の中心的集落遺跡であったこと

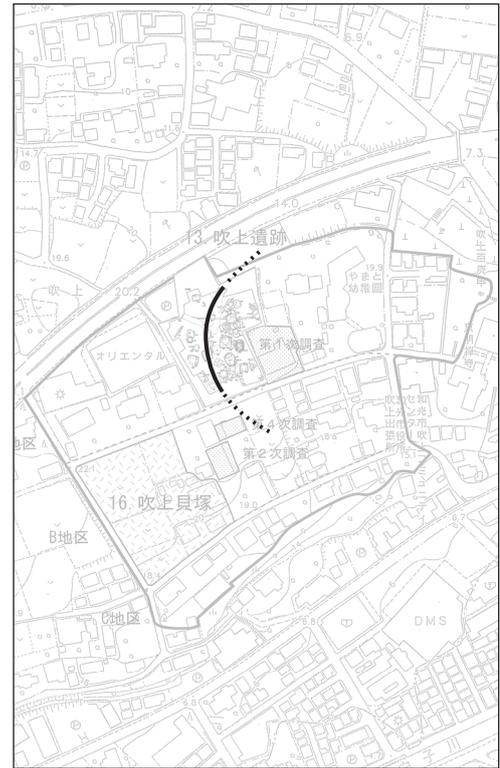


第259図 午王山遺跡周辺弥生時代遺跡分布図

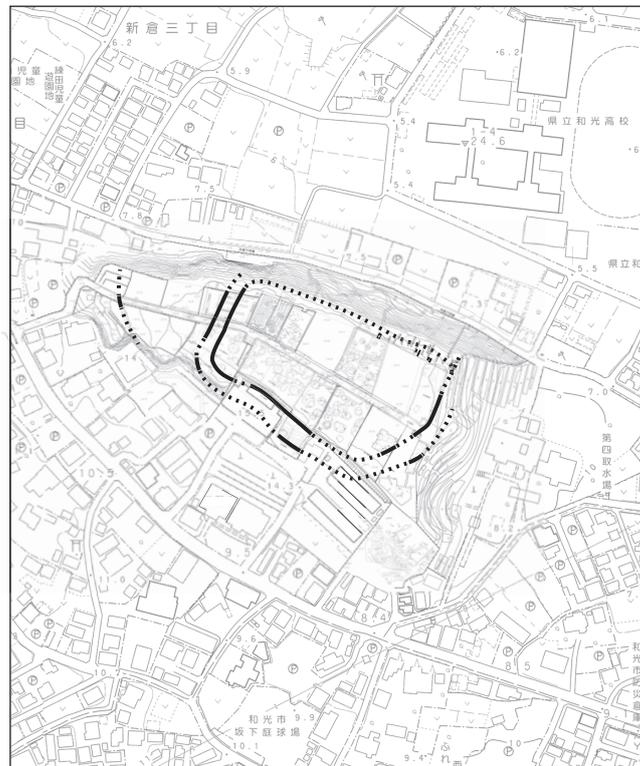
番号	遺跡名	番号	遺跡名
27	南割・西久保	44	下里
29	中道・岡台	45	吹上
30	向山	46	吹上原
31	宮台	47	市場峽・市場上
32	宮台・宮原	48	城山
33	新屋敷	49	成増一丁目
34	稲荷山・郷戸	50	成増百向・成増新田原
35	上之郷	51	成増との山
36	花ノ木	52	菅原神社台地上
37	半三池	53	赤塚氷川神社北方
38	峯	54	松月院境内・大門・赤塚下寺家番匠免
39	峯前	55	沖山
40	漆台	56	四葉地区
41	四ツ木	57	徳丸康・徳丸北野神社
42	午王山		
43	妙興寺		



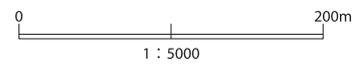
和光市花ノ木遺跡／半三池遺跡



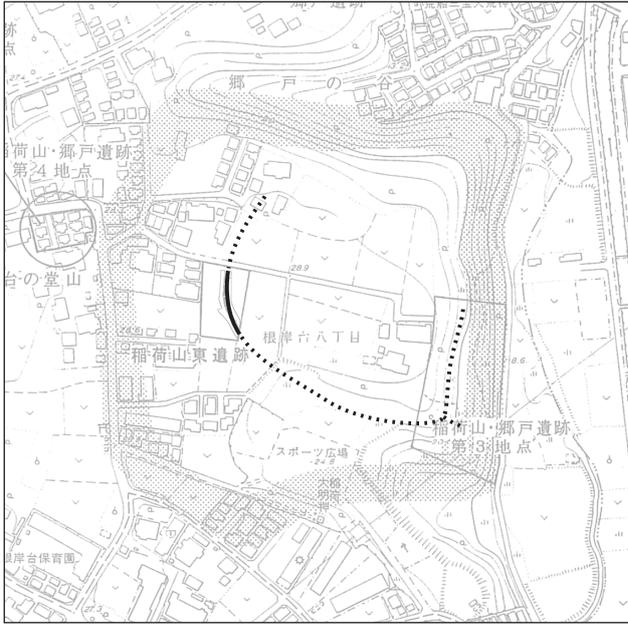
和光市吹上遺跡



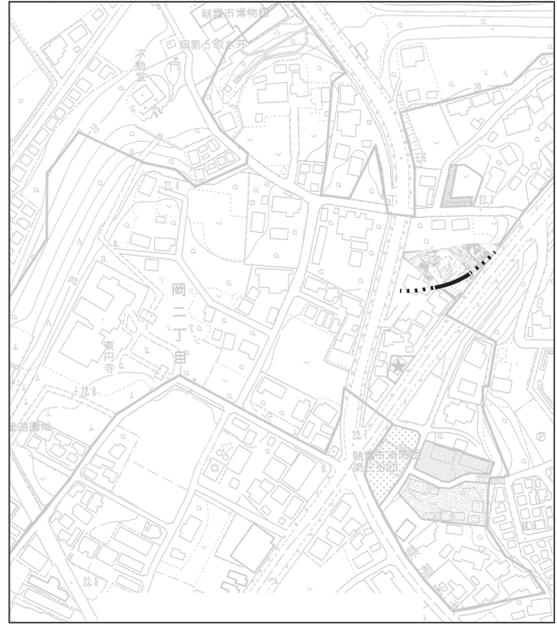
和光市午玉山遺跡



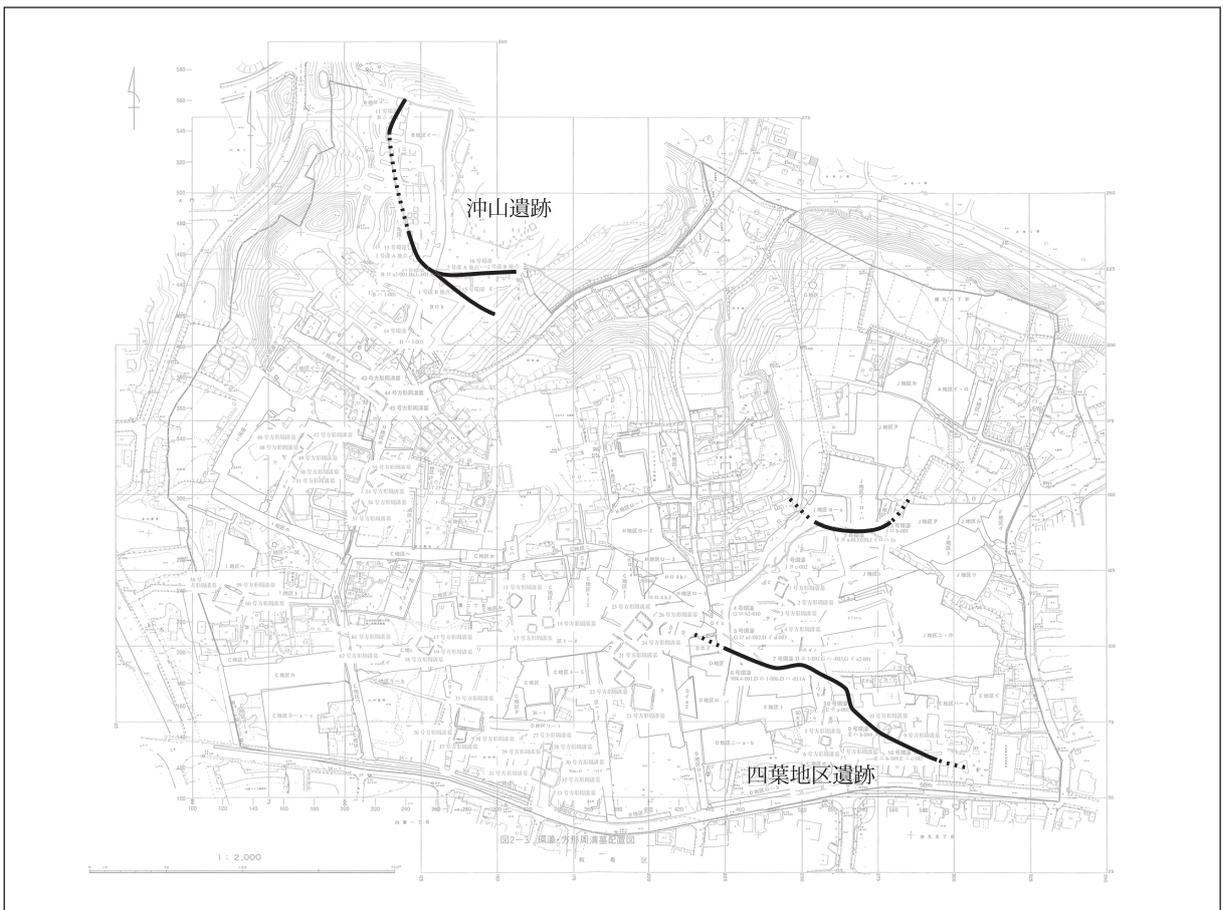
第 260 図 環濠集成図 (1)



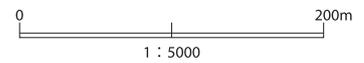
朝霞市稲荷山・郷戸遺跡



朝霞市中道・岡台遺跡



板橋区沖山遺跡／四葉地区遺跡



第261図 環濠集成図(2)

が確認できた。午王山遺跡は、中部高地系の岩鼻式土器文化の境界でもあり、東海東部系の下戸塚式土器文化の境界でもある。後の「東海道ルート」と「東山道ルート」の交差する位置であり、遺構・遺物の両方の特徴からも遠隔地との交流が、実際に裏付けられ遺跡の重要性が示された。

以上の調査成果を踏まえて、午王山遺跡は、関東地方を代表する集落遺跡の一つであるとともに、荒川流域を中心として弥生時代後期における拠点集落遺跡として、広域な地域間の文化の交流の過程が把握でき、今後さらに関東地方の弥生文化を解明する鍵となり得る重要な遺跡である。また、地形的にも独立丘という独特な地形上に一つの環濠集落が形成されており、低地を望む北側は急斜面で、南側の斜面には2条あるいは3条の環濠が廻る姿は山としての地形自体にも遺跡の存在価値が認められる。ほかには、独立した集落であるため確実に集落範囲が把握でき、集落内の各住居跡の分析ができる関東でも数少ない遺跡として非常に重要である。

現在でも、午王山遺跡上部から北側を見渡すと眼下には荒川と荒川低地及び湧水地跡（現・県立和光高校）、東には和光市吹上遺跡、板橋区赤塚氷川神社北方遺跡、西には和光市花ノ木遺跡、朝霞市新屋敷遺跡などが広く開けた視界で見渡すことができ、位置・立地としても弥生時代から現代までも視界が変わらない貴重な場所である。

これらを総合的に判断した結果、午王山遺跡は、弥生時代集落として上部の遺跡面から独立丘の麓まで含めて、重要かつ学術的価値も高く、今後、国民共有の財産として早急な保存・活用措置が強く望まれる遺跡である。

調査の課題と今後の保存活用について

本総括報告書により、午王山遺跡の調査経過、個別に行われた調査の集約、分析などにより調査成果や歴史的価値が全体を通して明らかとなった。しかしながら、北側斜面部（第23図）ではトレンチ調査での確認であるため、A溝が北側を廻ることはあくまで推定であり、同地点の南東端14・15トレンチでは、斜面を下ってゆく溝も確認されていることから、環濠としてのA溝、B溝が廻る方向性については、今後も確認調査等が必要で課題である。

また、午王山遺跡は、丘上面の埋蔵文化財包蔵地としての遺跡範囲だけではなく、独立丘という地形全体を含んだ形での環濠集落遺跡であることから「午王山」という山全体を含めた保存と活用が今後必要となる。午王山の北側では、急傾斜の斜面が集落を防御する地形効果を見せている部分も構成要素となるが、急傾斜のため土砂災害警戒区域にも指定されている。今後は、景観と安全対策を考え調整していくなかで、史跡として守っていく必要がある。

【註】

- 1) 江原 順 2016「(1) 向山遺跡(朝霞市)の銅鐸形土製品」『小さな銅鐸を追って - 銅鐸形土製品と小銅鐸 -』第31回企画展 朝霞市博物館 (p.9)
- 2) 稻荷山・郷戸遺跡第3地点は未報告であるが、『邪馬台国時代の朝霞』(p.1 写真)『あさかの歴史』(p.36 写真)などで航空写真が公開され、写真からも確認できる。稻荷山・郷戸遺跡は、和光市との境の越戸川を挟んだ花ノ木遺跡の対岸であるため、発掘中の現地も確認させていただいた。第261図は写真

から環濠推定線を加筆した。

【引用・参考文献】

- 朝霞市史編さん室編 1987 『あさかの歴史』 朝霞市
- 石岡憲雄 1982 『吉ヶ谷式』と『岩鼻式』土器について『研究紀要』第4号 埼玉県立歴史資料館
- 磯野治司 2019 「墓地に立つ板碑」『季刊 考古学』第147号 特集 板碑からみた神仏 雄山閣
- 板橋区史編さん調査会 1995 『板橋区史－資料編1 考古』板橋区
- 板橋区郷土資料館編 2001 『特別展 四葉地区遺跡－発掘調査の成果とその軌跡－』板橋区郷土資料館
- 岩田明広 2003 「認知科学的アプローチによる弥生時代後期土器文様の検討」『埼玉考古』第38号 弥生時代特集 埼玉考古学会
- 江原 順 2009 『第24回企画展 邪馬台国時代の朝霞－土器が語る交流の時代－』朝霞市博物館
- 江原 順 2016 『第31回企画展 小さな銅鐸を追って－銅鐸形土製品と小銅鐸－』朝霞市博物館
- 柿沼幹夫 2003 「芝川流域の宮ノ台式土器」『埼玉考古』第38号 弥生時代特集 埼玉考古学会
- 柿沼幹夫・宅間清公・的野善之 2005 「岩鼻遺跡（第2次）出土の『岩鼻式』土器について」『紀要』30 埼玉県立博物館
- 柿沼幹夫 2006a 「岩鼻式土器について」『土曜考古』第30号 土曜考古学研究会
- 柿沼幹夫 2007 「埼玉の弥生時代研究」『埼玉の弥生時代』埼玉弥生土器観会編 六一書房
- 柿沼幹夫 2009 「補足・意見－和光市午王山遺跡における岩鼻式土器－」『南関東の弥生土器2～後期土器を考える～』考古学リーダー16 関東弥生時代研究会・埼玉弥生土器観会・八千代栗谷遺跡研究会編 六一書房
- 柿沼幹夫 2013 「荒川下流域弥生時代後期土器に関する覚書」『埼玉考古』第48号 埼玉考古学会
- 柿沼幹夫 2016 「頸胴部帯縄文甕－交差編年・地域間交流の鍵－」『埼玉考古』第51号 埼玉考古学会
- 菊地有希子 2007 「住居と集落」『埼玉の弥生時代』埼玉弥生土器観会編 六一書房
- 久世辰男 2001 『集落遺構からみた南関東の弥生社会』六一書房
- 劔持和夫 1990 「荒川流域における中期後半の弥生集落」『埼玉考古』第27号 埼玉考古学会
- 小出輝雄 2007 「後期土器編年－県東南部地域－」『埼玉の弥生時代』埼玉弥生土器観会編 六一書房
- 小出輝雄 2007 「環濠の性格についての再考察－埼玉県内の例を中心として－」『埼玉の弥生時代』埼玉弥生土器観会編 六一書房
- 小出輝雄 2009 「いくつかの訂正と補足・反論」『南関東の弥生土器2～後期土器を考える～』考古学リーダー16 関東弥生時代研究会・埼玉弥生土器観会・八千代栗谷遺跡研究会編 六一書房
- 斎藤あや 2017 『土器から見た大田区の弥生時代－久ヶ原遺跡発見、90年－』大田区立郷土博物館
- 佐々木保俊 1996 『志木市の文化財第24集』志木市教育委員会
- 佐々木保俊ほか 2009 『西原大塚遺跡 第2分冊－西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書－』志木市遺跡調査会調査報告第13集 志木市遺跡調査会
- 佐藤康二 2016 「Ⅲ-1 稲作とともに変わる暮らし」『埼玉の考古学入門』さきたま出版会
- 杉山祐一 2015 【コラム2】「久ヶ原式土器のはじまり」『列島東部における弥生後期の変革～久ヶ原・弥生町期の現在と未来～』考古学リーダー24 西相模考古学研究会・西川修一・古屋紀之編 六一書房
- 鈴木一郎ほか 1994 『和光市埋蔵文化財調査報告書第13集』『午王山遺跡（第3次・第4次）－発掘調査報

- 告書 - 』和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 1995『白子宿上遺跡（第2次・第3次）』和光市埋蔵文化財調査報告書第17集 和光市遺跡調査会・和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 1996『午王山遺跡（第5次）』和光市埋蔵文化財調査報告書第18集 和光市教育委員会
- 鈴木一郎 1997「和光市の弥生時代」『第1回企画展 あさかの弥生文化 鉄斧とその時代』朝霞市博物館
- 鈴木一郎 1998「和光市午王山遺跡出土の弥生時代 中期末から後期前半の土器について（予報）」『あらかわ』創刊号 あらかわ考古談話会
- 鈴木一郎ほか 1998『市内遺跡発掘調査報告書1』-花ノ木遺跡（第1次）・吹上遺跡（第2次）・漆台遺跡・白子向山遺跡・白子宿上遺跡（第5次）-和光市埋蔵文化財調査報告書第20集 和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 2000『和光市市内遺跡発掘調査報告書3』-午王山遺跡（第6次）弥生時代以降編・花ノ木遺跡（第3次）-和光市埋蔵文化財調査報告書第23集 和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 2001『城山南遺跡（第3次）・白子宿上遺跡（第4次）発掘調査報告書』和光市埋蔵文化財調査報告書第25集 和光市遺跡調査会・和光市教育委員会
- 鈴木一郎 2001「和光市午王山遺跡における弥生時代時の変遷」『あらかわ』第4号 あらかわ考古談話会
- 鈴木一郎ほか 2002『四ツ木遺跡（第3次）・妙典寺遺跡（第1次）発掘調査報告書』和光市埋蔵文化財調査報告書第26集
- 鈴木一郎 2003「和光市午王山遺跡の櫛描簾状文土器」『埼玉考古』第38号 弥生時代特集 埼玉考古学会
- 鈴木一郎ほか 2003『吹上遺跡（第3次）』和光市埋蔵文化財調査報告書第30集 和光市遺跡調査会・和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 2004『峯遺跡（第2次）・上之郷遺跡（第1次）・峯前遺跡（第2次）・松山遺跡（第1次）・花ノ木遺跡（第5次）・午王山遺跡（第7次）-発掘調査報告書-』和光市埋蔵文化財調査報告書第31集 和光市遺跡調査会・和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 2004『市内遺跡発掘調査報告書7』-越後山遺跡（第4・5次）・午王山遺跡（第8次）-和光市埋蔵文化財調査報告書第33集 和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 2004『四ツ木遺跡（第4次）発掘調査報告書』和光市埋蔵文化財調査報告書第34集 和光市遺跡調査会・和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 2005『市内遺跡発掘調査報告書8』-午王山遺跡（第9次）-和光市埋蔵文化財調査報告書第35集 和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 2006『市内遺跡発掘調査報告書9』-午王山遺跡（第8・9次）旧石器時代編・仏ノ木遺跡（第4次）-和光市埋蔵文化財調査報告書第36集 和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 2007『市内遺跡発掘調査報告書10』-城山遺跡（第2・3次）・花ノ木遺跡（第9次）・漆台遺跡（第2次）・午王山遺跡（第13次）-和光市埋蔵文化財調査報告書第38集 和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 2008『市内遺跡発掘調査報告書11』-午王山遺跡（第11次）-和光市埋蔵文化財調査報告書第39集 和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 2009『市内遺跡発掘調査報告書12』-午王山遺跡（第12次）-和光市埋蔵文化財調査報告書第40集 和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 2010『市内遺跡発掘調査報告書13』-午王山遺跡（第14次）-和光市埋蔵文化財調査報告書第42集 和光市教育委員会

- 鈴木一郎 2011 「弥生時代の環濠について覚書 - 埼玉県和光市午王山遺跡から -」『あらかわ』第13号 あらかわ考古談話会
- 鈴木一郎ほか 2012 『市内遺跡発掘調査報告書15』 - 四ツ木遺跡（第5次）・午王山遺跡（第15次）・白子宿上遺跡（第6次）・上之郷遺跡（第2次）- 和光市埋蔵文化財調査報告書第46集 和光市教育委員会
- 鈴木一郎 2012 【コラム】「遺跡の史跡保存について - 埼玉県和光市午王山遺跡から -」『あらかわ』第14号 あらかわ考古談話会
- 鈴木一郎ほか 2014 『午王山遺跡（第10次）・妙典寺遺跡（第5次・第6次）・峯前遺跡（第6次）』和光市埋蔵文化財調査報告書第57集 和光市遺跡調査会・和光市教育委員会
- 鈴木一郎 2015 「和光・朝霞市域の奈良・平安時代の集落遺跡について」『あらかわ』第16号 あらかわ考古談話会
- 鈴木敏弘ほか 1981 『埼玉県和光市新倉午王山遺跡』和光市午王山遺跡調査会
- 鈴木敏弘ほか 1981 『埼玉県和光市新倉午王山遺跡 - 発掘調査報告 - 』和光市午王山遺跡調査会
- 鈴木敏弘ほか 1993 『和光市埋蔵文化財調査報告書第9集 埼玉県和光市 午王山遺跡 - 発掘調査報告書 - 和光市教育委員会
- 高橋 健ほか 2017 『横浜に稲作がやってきた！？』横浜市歴史博物館
- 谷井 彪 1966 「大和町新倉午王山出土の弥生式土器」『埼玉考古』第4号 埼玉考古学会
- 谷井 彪・高山清司 1968 「大和町の遺跡と出土土器（弥生・古墳時代）」『埼玉考古』第6号 埼玉考古学会
- 谷井 彪・宮崎朝雄 1975 『台の城山遺跡』朝霞市教育委員会
- 知久裕昭 2012 『幡羅遺跡Ⅷ - 総括報告書Ⅰ - 』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第127集 深谷市教育委員会
- 照林敏郎 2002 『中道・岡台遺跡第3地点発掘調査報告書』朝霞市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集 朝霞市教育委員会
- 照林敏郎 2004 『第15回企画展 古のにひくら 朝霞市・新座市・志木市・和光市出土品展』朝霞市博物館
- 内藤千紗 2015 【コラム5】「吉ヶ谷式土器研究に対する展望と課題」『列島東部における弥生後期の変革～久ヶ原・弥生町期の現在と未来～』考古学リーダー24 西相模考古学研究会・西川修一・古屋紀之編 六一書房
- 中岡貴裕 2014 「埼玉県和光市新倉午王山の新羅王居伝承と発掘調査」『あらかわ』第16号 あらかわ考古談話会
- 中島広顕 2018 『史跡 中里貝塚総括報告書』北区教育委員会
- 中村倉司ほか 1994 『検証！関東の弥生文化』埼玉県立博物館
- 中村倉司ほか 2009 『平成21年度特別展 埼玉圏の原始・古代人 - 人の動きをモノから探る - 』埼玉県立川の博物館
- 西井幸雄・新屋雅明 1994 『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 西相模考古学研究会編 2014 『久ヶ原・弥生町期の現在 - 相模湾 / 東京湾の弥生後期の様相 - 』西相模考古学研究会 記念シンポジウム資料集 西相模考古学研究会

- 野沢 均ほか 1997『第1回企画展 あさかの弥生文化 鉄斧とその時代』朝霞市博物館
- 野沢 均 1998「弥生時代中期後半から後期前半の土器編年についての一考察 武蔵野台地北西部を中心として」『あらかわ』創刊号 あらかわ考古談話会
- 野沢 均 1999「弥生時代中期後期の集落分布について」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
- 野沢 均 2001「朝霞市近傍の弥生時代研究の現状」『研究紀要』第4号 朝霞市博物館
- 秦野昌明 2001「双角有孔土製品の分布と役割の一考察」『埼玉考古』第24号 埼玉考古学会
- 比田井克仁 1997「弥生時代後期における時間軸の検討」『古代』第103号 早稲田大学考古学会
- 比田井克仁 2009「久ヶ原式成立期の東京湾西岸・武蔵野台地の様相」『南関東の弥生土器2～後期土器を考える～』考古学リーダー16 関東弥生時代研究会・埼玉弥生土器観会・八千代栗谷遺跡研究会編 六一書房
- 比田井克仁 2010「久ヶ原式をめぐる東京湾西岸地域－櫛描文世界との遭遇と宮ノ台式の消滅－」『法政考古学』第36集 法政考古学会
- 肥沼正和 1997『稻荷山東遺跡』朝霞市文化財調査報告書第19集
- 牧田 忍 2009「武蔵野台地後期弥生土器考く午王山式は可能か」『埼玉考古』第44号 埼玉考古学会
- 松本 完 1990「環濠集落の地域性」『季刊 考古学』第31号 雄山閣
- 松本 完 1996『下戸塚遺跡の調査』第2部 早稲田大学校地埋蔵文化財調査室編 早稲田大学
- 松本 完 2007「武蔵野台地北部の後期弥生土器編年－埼玉県和光市午王山・吹上遺跡出土土器を中心として－」『埼玉の弥生時代』埼玉弥生土器観会編 六一書房
- 村田健二・劔持和夫・書上元博・石坂俊郎・福田 聖・佐藤康二 1998「木曾良遺跡の研究(1)」『研究紀要』第14号(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 山田尚友 1998「荒川下流域の弥生時代中期宮ノ台期の集落」『あらかわ』創刊号 あらかわ考古談話会
- 山本 龍・鈴木一郎 2013「和光市指定史跡『午王山遺跡』の紹介」『あらかわ』第15号 あらかわ考古談話会
- 弥生土器を語る会編 1996『YAY! 弥生土器を語る会 20回到達記念論文集』弥生土器を語る会
- 横浜港北ニュータウン埋蔵文化財調査団編 1986『古代のよこはま』横浜市教育委員会・横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 吉野 健 2013『西別府祭祀遺跡、西別府廃寺、西別府遺跡 統括報告書I』熊谷市教育委員会
- 和光市史編さん室 1980『図説 和光市の歴史』和光市
- 和光市史編さん室 1981『和光市史－史料編1』和光市
- 和光市史編さん室 1987『和光市史－通史編上巻』和光市